雑文　第二集

医療人を目指して

佐竹　正延

雑文　第二集

医療人を目指して

佐竹　正延

目次

河北新報「プリズム」掲載の文章

故郷の風景（一）　ダウンタウン　オブ　センダイ　4
故郷の風景（二）　福島へ至る国見峠　5
故郷の風景（三）　仙台の里山　6
米国の風景（一）　学術の中心、ボストン　7
米国の風景（二）　政治の中心　ワシントン　8
米国の風景（三）　南軍の中心　サウス・カロライナ　9
読書の楽しみ（一）　与謝野晶子訳　源氏物語　10
読書の楽しみ（二）　源氏物語の女性群像　11
読書の楽しみ（三）　雨月物語と高野聖　12
音楽と映像（一）　ドヴォルザーク　13
音楽と映像（二）　演歌とソナタ　14
音楽と映像（三）　西欧修道会の映画を観る　15
日々の暮らしから（一）　米国と日本の家の中　16
日々の暮らしから（二）　酒は薬か、毒薬か　17

日々の暮らしから（三）　ダンスとニャンコ　18
研究者を目指して（一）　学生時代について　19
研究者を目指して（二）　英語について　20
研究者を目指して（三）　研究不正について　21
文章について（一）「デス」と「マス」　22
文章について（二）　大学の先生　23

雑

慶事and惜別　24
研究者を終えるにあたって　27
頓珍漢問答集　教養とは何か？　28

あいさつ

大学・研究・教育関係の各位へ、謝辞　34
医療人を目指して、仙台富沢病院職員の皆様へ　35

あとがき　37

著者略歴　38

故郷の風景（一）　ダウンタウン　オブ　センダイ

我が国の都市は、街路にゴミやチリの一つも落ちてはいない、清潔さで定評があります。が、通りの見通しの悪さや、建物の大きさ・形・色調がてんでバラバラなことなど、都市景観そのものは、あまり魅力的とは言えません。そこで我らが町、仙台です。悪評を払拭するシーンを求めて、車で徘徊、二十年。発見したのが、以下の仙台三大美観です（注、多少の誇張あり）。第一、仲之瀬橋の上から北に眺める、大学病院を中心としたホワイト基調の建築群。広瀬川が眼下に切れ込んでいる為か、ビルが実際以上に大きく見え、まるでローマ神殿の如き偉容で迫ってきます。第二は愛宕大橋から五橋方面に北上する際の景色。米国のハイウェイとも見まごう、両側十車線もの広大な道路が、少しずつ高度を上げる前方には、駅や県庁近辺の高層ビル群が聳え立ち、正しく米国大都会の雰囲気が漂います。そして極め付けは、泉区・寺岡からの市街地遠景。段丘の上を走る道路から、一段、下がって広がる田園地帯のはるか向こう。南に御座す仙台大観音像から、中山の丘陵地が東に向かって緩やかに下っていったその先に、市街地のビル群が屹立しているのです。スカイラインが朝靄の彼方に浮かぶのも、夕陽に照り映えるのも、いずれも日本離れした景色であり、これぞ、センダイ・ダウンタウン。何だか、アトランタ辺りをドライヴしている気分に、私はなるのです。

（河北新報　二〇一四年　四月十六日　掲載）

故郷の風景（二）　福島へ至る国見峠

筆者が勤務しておりました東北大学。学生も教員も東北地方出身者が多いのは確かです。しかし我が国有数の研究中心大学である東北大学の教授陣は、全国区。彼等の生まれや卒業大学は、全国各地に及びます。で、関東や関西出身の先生が退職時に記す、東北での想い出の記。そこに時々、登場するからには、折紙付きと言えるのが本日のテーマ、福島市北方の景観であります。五月の連休から六月にかけての時分、東北自動車道を白石市から南下し、山間の越河の町を経て国見峠に至ります。そこから道路は、山の中腹を巻きながら、裾野へ向かってゆるやかに弧を描きながら、福島盆地へと下っていくのですが、その眺めや如何に。車窓の左側前方には霊山。絶壁がスッと切り落とされているのが望まれます。正面前方の眼下には、漸くにして緑が芽吹きつつある信夫盆地が開け、その先に吾妻連峰がせり上がっていきます。吾妻小富士の抱く兎形の残雪が、陽光を浴びてまぶしく光る様は喩えようもなく美しい。そしてハイウェイが里の低みまで下りきりますと、そこは米とともに、果樹栽培も盛んな土地であります。初めは、桃の花の紅。続いて、りんごや梨の白い花弁。田代に張られた満々たる水がキラキラ輝くのと、あい呼応しております。桃花も梨花も、漢詩になくてはならぬアイテムであるのは御承知の通り。これぞ陶淵明いう所の桃源郷でなくして、何でありましょうか。自分が福島で過ごしましたのは、高校までの十八年。しかるに東北大学での勤務は二十年。皆様、如何でしょう。出身地の異なる同僚の目に、自分の故里はどの様に映っているものなのでしょうか？

（河北新報　二〇一四年　四月三十日　掲載）

故郷の風景（三）　仙台の里山

大学勤務時代の話です。研究室における研究推進は、教員と大学院学生によって担われています。東北大学の場合、学生の十七％が留学生。私も、中国・マレーシア・バングラディシュ・ルーマニア・スウェーデン・ブラジルの男子・女子学生を受け入れました。入学生が研究室に参加する際には歓迎会、卒業生が去る折には送別会。夜の繁華街にくり出し、ワイワイやるのですが、私はどうもこの種の飲み会が好きではありませんでした。日本語すらよく聞こえない喧噪の中、英語で喚かれたりしても、何が何だか分からない。研究とは、酒は飲まずに騒がずに、論理を立てて議論するものである。しかしながら、そんな生硬ばかり言っていては学生さんが、そもそも私自身が保ちそうにありません。そこで採用した飲み会に代わる私の企画は、ハイキングでした。希望する学生さんを募って、よく山や川に遊びに行きました。泉が岳、撫倉山や笹倉山の七つ森、二口渓谷に山寺といった具合。時候は新緑や紅葉。場合によっては行き先で芋煮会やバーベキュー、帰りは温泉に入浴です。山は何れも里山であり、標高も左程ではありませんから、歩く行程はせいぜい三―四時間。山頂から自分達の住む街、仙台市街を眺めながらのお昼御飯は格別でありました。ところで日本人であれ外国人であれ、学生さんにとって仙台は一時滞在、通過する街でしかありません。彼等の心に仙台は、どの様に映っているのでしょうか。かく言う私も、留学時に住んだのは米国の都市。学会で出かけ、用事を済ませば戻ります。戻るその街は米国、外国なのではありますが、なぜかホッと、自分の街に帰ってきた気分になった事が思い出されます。

（河北新報　二〇一四年　七月二十三日　掲載）

米国の風景（一）　学術の中心、ボストン

生まれ育ちが福島市ですので、自分の発音は東北弁です。日本語の発話が東北弁であるばかりではありません。外国の学会で私が発表するのを聞いていた日本人研究者が言うには、「東北なまりの英語だね。」若かった自分は、気恥ずかしく感じたものです。しかし周囲を見ますと、フランス人やドイツ人の話す英語も、相当なまっていて、聞き取りにくい。よって日本語なまりはおろか、東北なまりの英語があっても、何ら不思議はありません。むしろ年を経るに従い、東北弁を愛おしく思う気持ちが、強まって参りました。大学の教員でしたから、教え子の結婚式に招待され、スピーチする機会がございます。新宿のホテルでの披露宴が退けた後、見知らぬ方が私に寄って来ておっしゃるには「先生、懐かしかったです。」私「どちら様でしょう。」女性「今は東京在住ですが、昔、東北大学の学生でした。当時、耳にしたイントネーション。今日、再び聴くことが出来、青春時代を想い出したのです。」よくよく聴きますと東北弁は、実に優しく、柔らかに響きます。にも拘らず、自らの発音を苦にしたりしたのは、きっと、「東北」のネーミングがイケナイのだ。イメ・チェンを図る必要があります。「東北」は、方角でいえば「北東」です。米国でノース・イーストといえば、ニュー・イングランド地方。つまり、我が国の北東（東北）地方は、米国のニュー・イングランドに当たります。以下、順番に宮城県はマサチューセッツ州。仙台市はボストン市。広瀬川はチャールズ・リヴァー。東北大学はハーヴァード大学に相当する、というのが私の提案です。今度は、格好良すぎるかも。

（河北新報　二〇一四年　四月二十三日　掲載）

米国の風景（二）　政治の中心　ワシントン

三月まで在籍しておりました、東北大学の加齢医学研究所。主要建物の外側は、レンガ色のタイル貼りで仕上げてあります。しっとりと落ち着いた感じで、研究所にふさわしい風格を漂わせておりました。一方、同じキャンパス内ですが南の医学部は、全く異なる印象を与えます。病院で働く医師や看護師が白衣を着用しているからでしょうか、建物の外壁は白を基調としており、清潔を象徴するかの様です。ここで突然ですが、建物の対比を街並みに敷衍すると、次のようになるのではないか。加齢研に対応するのは米国北東部の都市、ボストンです。清教徒が最も早くに植民して興した古い街であり、旧市街にはシティ・ホール（市役所）やファナル・ホール（商会）をはじめ、褐色レンガ積みの建物が多く、ボストン・ブラウンと称されて夙に有名です。ボストン・バッグも茶色ですしね。またボストンには世界最高峰の大学であるハーヴァード大学やマサチューセッツ工科大学があり、学術文化の一大中心地。ノーベル賞研究者なんて、掃いて捨てる程、いらっしゃいました。では他方、医学部に相当する都市はといえば、米国の首都、ワシントンではないでしょうか。ホワイト・ハウスはその名の通り、白亜の建物。他にも議会や政府の庁舎、ワシントン・モニュメントからリンカーン・メモリアルまで、殆どの公共建築物が白い大理石の佇まいです。そしてワシントンは政治の中心。東北は田舎出身のこの私。自慢は、米国と言わず世界の二大中心地にて、青春の日々を送ったことです。でも、残念。我が国の中心、東京在住の経験はございません。東京は、何色なのでしょうか？

（河北新報　二〇一四年　六月十八日　掲載）

米国の風景（三）　南軍の中心　サウス・カロライナ

三十年前の昔、米国は東海岸線に沿って北はボストン、中央はワシントン、南はサウス・カロライナ州コロンビアの、各都市に住んでいたことがあります。従って東海岸を南北に縦断するインターステイト・ハイウェイ、I95はよくドライブしました。カナダ国境からフロリダ半島まで、全長一九〇〇マイル（三〇〇〇キロメートル）。周囲の風物と言いますと、最高の標高は北のホワイト・マウンテン、最低は南のキー・ウエスト。散在する大都市としては、ニューヨークにフィラデルフィア。また延々とうねり続く丘陵地帯、満々と水をたたえる大河川、見はるかすこともできない広大な湿地帯も横たわっています。四季もはっきりしていて、春はドッグウッドの花、秋はメイプル・ツリーの紅葉。これら風光の何も彼もが私は、大好きでありました。当時、米国とソ連邦は冷戦状態にありましたが、ベトナム戦争は終結、海外への大きな派兵もテロリズムの脅威も無く、米国社会は平和な気分に満ちていたのです。そののんびり感を最も良く体現していたのは、南部諸州ではなかったかと思われます。田舎の街では、通りに面する家のポーチのロッキング・チェアに腰をかけ、人の往来を見ながら日がな一日を暮らす。日陰を作るオークの木、枝にかかるスパニッシュ・モスが微風に揺れる。戦跡地に見る、「風とともに去りぬ」に見る、かっての南北戦争は今いずこ。心地良いもの憂さと気だるさに浸り、眠っているかのごとき、米国深南部。懐旧の想いを詩に賦すのに、まことにふさわしい土地でありました。安直なグーグル・アースなどではなく、自分でドライブし再訪するのが、老いての念願です。

（河北新報　二〇一四年　七月三十日　掲載）

読書の楽しみ（一）　与謝野晶子訳　源氏物語

男のくせに、と言われそうですが私の愛読書、しかも唯一の愛読書は源氏物語です。二十歳の大学生以来、四十年この方、折々に読み返しております。ただし、誰が主語なのか定かでなく、文の区切りがどこかも分からない、朦朧調原文はとうてい読めません。訳本のお世話になります。自分が親しんでいるのは、昭和十三年刊行の与謝野晶子訳。初めて彼女の訳に触れた時の驚きは、今も鮮明に覚えております。というのは、原文のもやもや・イメージとは、全くの対極。さらに、「乱れ髪」や「柔肌」で有名な晶子女史なので、感情過多の浪漫文体かと思いきや、その正反対でありました。つまり女史の筆は、男女の人情、恋情の機微を明晰に描き尽くして、間然する所がないのです。フランスは古典派悲劇作家のラシーヌ、自然主義のフローベル。人間心理を活写して極致と言われる彼等も、真っ青です。理知的な近代日本語口語は、晶子女史が確立したのではないでしょうか。と書けば、女史は一体、何事を詳らかに描いているのであろうか。源氏物語のテーマは男女の恋であります。異なる二人の間のイベントであるからには、恋の駆け引き、と言って語感が悪ければ、交渉事が出来します。その交渉経緯を、心の内面に立ち入って精緻・正確に描かねばならないのだから、文は明々白々、論理的にならざるを得ない。それにつけても訝しいのは、我が大和民族の本性です。平安の優男や貴女にとって人生の一大事は、男女の事どもでした。しかるに明治時代に至るや、殖産興業に富国強兵。平成の現代は科学技術立国と、我々、四角四面に生きております。どうしちゃったのだろう。

（河北新報　二〇一四年　五月二十一日　掲載）

読書の楽しみ（二）　源氏物語の女性群像

源氏物語に登場する数多の女性。誰に魅力を感じるかは、読者の女性観の反映であり、諸家が様々に評してきた所です。私も蛇足を付け加えますと、若かった頃に惹かれたのは、明石の上でありました。明石は低い身分の出自であり、美人という訳でもない。しかし、それらを補って余りある聡明さの持主です。光との間に生まれた娘を取り上げられて紫の上の養女にされてしまう悲哀に遇いながらも、矜持を保った結果、娘は遂に后の位に上り、自分も周囲の尊崇の念を集めました。即ち、成功を収める為に、合理的に身を処したのです。研究者を目指して励んでいた三十歳の私にとって、論理は最優先事項。なぜならサイエンスでは、論理なくしては何事も不可能だからです。勿論、明石の上は科学者ではありません。ですが彼女の知性は、サイエンティストを女性に引き写せばかくあるべしと私に思わせたのでした。しかるに六十歳を過ぎる頃から、自分の好みが変化してきたから不思議です。理知は大いに結構であるものの、人間、そればかりでもあるまい。つまり私も研究生活が終わりに近づき、ようやく論理に飽きがきたのでしょう。代わって浮上したのが朧月夜の内侍。婚約者がいながら光になびく軽薄さを、昔の私は軽侮したものでしたが、よく読みますと光が無理矢理に言い寄るのが真相であり、内侍は光に惹かれる自分に正直なだけです。また、貴人の教養として欠かせない書は、当代随一の華やかさであり、あでやかな美貌と相俟って、「グーな女」と感嘆せざるを得ない。理性的な女性と情感豊かな女性。あるいは、論理と感性。私にとっての源氏物語であります。

（河北新報　二〇一四年　六月二十五日　掲載）

読書の楽しみ（三）　雨月物語と高野聖

「私はダンスが好きです。ええ、社交ダンス。時々、熟女のご婦人にお相手を願っております」とあるパーティで披露しましたら、「先生、熟女なんて古い。今は、美魔女というんですよ」と、同席の女性より教えられました。腰を抜かさんばかりに驚いたとは、このことです。というのは「美魔女」平たく書けば「美しくも、魔性の女」となります。そして、それなる女は、日本文学は幻想小説の最高傑作、「雨月物語」と「高野聖」に登場する「真女児（まなこ）」と「女」以外に、私には考えられません。二人の女性（にょしょう）が美しいのは当然ですが、「真女児」は実は、年老いた雌大蛇（メスおろち）の化身。契りを結んだ男から精気を吸い取り、いずれはパクリと飲み込んでしまうという恐ろしい大蛇です。一方、「女」は人間の女ではあるものの、その色香に迷う下司な男供を、仕返しとばかりに猿や蝙蝠に変えてしまう魔力の持ち主。男の方も、美魔女がそんな罠を設けて待ち受けていることを知らない訳ではないのです。分かっているのだけれども、抗うことができない。否、むしろ、自ら進んでゴックン、食べられても良いとまで思わせる程の妖艶さなのです。この辺りを描写する上田秋成、泉鏡花の筆は冴えに冴え渡り、魔女と美文が揮然一体となって攻め立ててくるものだから、惹き込まれ、夢美心地となって、陥落するのは止むを得ない仕儀、という次第です。そこで冒頭のダンスに戻ります。人格の円熟完成した熟女と踊り、ジェントルマンの品位を保ちたいのか。それとも品性下劣を自ら認め、捕って食われてもいいから美魔女と踊りたいのか。世の男性諸氏、どちらをお選びでしょうか。

（河北新報　二〇一四年　八月六日　掲載）

音楽と映像（一）　ドヴォルザーク

ふと聞いたメロディーに、心を揺さぶられる経験は、どなたもお持ちのことと思います。それは私が、三十歳の時でした。実験が夜までかかり、一人でいる寂しさを紛らす為に、ラジオをつけたのです。流れていたのはクラシック、室内楽でありました。ズーンと心に響いた主旋律の印象はといえば、格調が高いこと。それでいて親しみ易く、その場でフォローできるメロディでありました。主題は変奏に移り、暫くしてもう一度、主題が劇的に再演されて、曲は終了。作曲家名・曲名を聴き取るべく待ち構えていた、私の願いは叶いませんでした。アナウンスはあったのですが、英語での案内だったのです。というのは当時の私、米国はワシントン近郊の研究所に勤めていた折の経験であり、英語の聴取力が十分でなかったのでした。それから三十年。一体、あの、心に汲み入る楽曲は、何であったのであろう。常に心に懸かっておりました。しかしながら、図書館収蔵のCDを借用しても、音楽に詳しい友人に尋ねても、解は得られず。そうして還暦を過ぎました頃、インターネットの発達とユー・チューブの充実のおかげで、偶々、何かをクリックした拍子に、彼の音楽が再び眼前したという訳です。それは、ドヴォルザーク作曲、「管楽器・チェロ・コントラバスのためのセレナード」作品四四。改めて聴く高い格調は、三十年前の自分の記憶と正しく合致しました。単なる印象だけでその曲であると、なぜ確言できるのか？　初恋の人に、三十年後に再会したとして、ひと間違いをすることはないと思うのですが、いかがでしょう。（注）Dvorak と serenade の英語発音は、カタカナとはまるで異なります。

（河北新報　二〇一四年　五月二十八日　掲載）

音楽と映像（二）　演歌とソナタ

私が米国の大学や研究所で、七年近くを過ごしたのは三十年前のことです。一つは田舎町に住んでいたため、もう一つはインターネットなんてありませんでしたから、見るもの、聞くもの、出会うもの、周囲は全て外国。日本的要素は、自分とオクさん以外にはかけらも無いという暮らしをしておりました。従いまして、日本食を食べたい、日本語の新聞を読みたい、日本の音楽を聞きたいと、無性に日本が恋しくて、故国の実家に頼んでは、日本品を送ってもらいました。ＣＤもユー・チューブも無い当時、音楽はテープでして、再生して聞いたメロディーの数々といえば、コロンビア・ローズ「東京のバス・ガール」島倉千代子「東京だよ、おっかさん」石原裕次郎「赤いハンカチ」加山雄三「旅人よ」ブルー・コメッツ「北国の二人」かぐや姫「赤ちょうちん」井上陽水「心もよう」。現在、六十三歳の小生が、青少年時代に聴いた歌謡曲やフォーク・ソングです。異国の地でこれらに耳を傾けておりますと、故郷恋しさで胸が一杯になり、涙まで浮かんできたものです。ですが、ここで不思議だったのが、傍らに控えている、マイ・オクさん。ちっとも感無量の様には見えない。私達は見合い結婚で、一緒になるにあたって彼女が持参したのは楽譜です。リスト・アップしますと、ブルクミュラーの練習曲。チェルニーやクレメンティのソナチネ。モーツァルトやショパンのソナタ。小生の音楽リストは漢字に平仮名、オクさんはカタカナ。ゆえに、曲への反応がまるで異なるのは、合点がいかない訳ではありません。しかしながら、ここまで考察して、かえって不思議が深まるのは、オクさんと自分はかくも異なる、だけど、なぜか一緒にいる、その事実なのでありました。夫婦って、不思議です。

（河北新報　二〇一四年　七月二日　掲載）

音楽と映像（三）　西欧修道会の映画を観る

分子・細胞生物学を研究していた小生が、信者でもないのにミッション・スクールに出向き、福音書はマタイ伝の一節を題材に、「いのち」について授業をしたことがあります。後日、校長先生から頂いた礼状には、修道僧と小鳥が描かれておりました。それで思い出したのが四十年前に観た、西欧中世を描いた映画です。十字軍より帰還した若者に改心が訪れ、全てを捨てて無所有となり、貧しき者・病める者と交わります。次第に同志が集まるものの、教会との軋轢も生じ、遂に若者はローマにおもむき、修道会の設立を法王に嘆願するシーンで幕。接見を許された教皇庁の豪華絢爛なホール、居並ぶ司教・枢機卿の威厳もものかは、素足素衣で立ち向かう若者のひた向きな心意気。美しい主題歌の効果もあり、心洗われる思いでありました。もう一つの映画は十年前のものですが、舞台は同じく西欧中世。少年を連れた旅の僧が宿泊した修道院にて、わずか数日のうちに、摩訶不思議な変死事件が次々と起こります。明敏なる彼の僧が推理を働かして、謎解きに迫るのですが、その間にも、異端審問やら、少年僧が女戒の禁を犯すなどが同時並行。聖なるはずの修道院に悪徳がしのび寄り、怪奇はますます深まっていくのです。そしてとうとう悪の根源と覚しき膨大なる古文書館、ふとした失態から火が生じ、夜の闇に明々と燃え盛り、焼け落ちていくのでした。前の映画はアッシジのフランチェスコを描いた「ブラザーサン・シスタームーン」後の映画は、ウンベルト・エーコ作「薔薇の名前」旅の僧は、フランチェスコ会士です。聖性と悪徳の大問題はさておき、小問題です。小鳥に説教したことで有名な聖者は誰か？

（河北新報　二〇一四年　八月十三日　掲載）

日々の暮らしから（一）　米国と日本の家の中

知り合いのアメリカ人研究者を、自宅に招待したことが何度かあります。家人が作る普通の料理でもてなすだけですが、それでも彼等にとっては、珍しい体験になるのではと想像します。そもそも家に入る時、玄関にはタタキがあって、そこで靴を脱いでから家の中に上がります。御承知のように米国では、玄関を開けるや、直ちに部屋につながっており、靴をはいたまま入室。タタキのような、外と内との中間が存在しません。また、夜ともなりますと、我が家の内部は昼間のように明るいのですが、これは照明器具が天井に取り付けられていて、部屋全体を照らしているからです。ところが米国では、床置きかテーブル置きのランプなので、その周りが明るいだけで、部屋全体としては相当に暗い。ソファに座っている互いの顔もボンヤリとしか見えないのです。以上の相違はよく知られたことですが、実際に自分が米国の家庭を体験してみると、強い印象を抱くものです。外国人を街中のレストランで接待するのもありでしょうが、自宅への招待も一興かと思われます。話はしかし、外国と日本との間に限りません。同じ日本人同士でも、稀に他人のお宅を訪問し、覗かせて頂くと、随分と驚くものです。我が家では家人も小生も、部屋は広々と使う方がよいとの方針。家の中には何の調度品もソファもございません。ですので、色んな飾りが壁面を埋め、床面に置かれているよそ様を拝見すると、クラクラします。逆によそ様の目に拙宅は、余りの素気なさで絶句なのかもしれません。家の中って、そこに住む人の反映。何かしらの味、個性があって、外国人ならずとも十分に面白い見物ではあります。

（河北新報　二〇一四年　六月四日　掲載）

日々の暮らしから（二）　酒は薬か、毒薬か

只今、六十三歳ですが、五十歳でお酒を断った経緯について記します。強くはありませんでしたが、元々、お酒は好きでした。友人と一緒ですと、酒を肴に仕事の話。共に研究者を目指しておりましたから、研究の話で座は大いに盛り上がります。研究が進展し、当方が躁状態にあれば、大発見でもしたかのような大言壮語。逆に、研究が遅延しうつ状態にあれば、グチにボヤキ。その場では確かに、白熱した議論であったり、ストレスも解消できた気になるのですが、それはその時限り。翌朝になると、議論の中味なんて覚えていないし、ストレスの原因が解決した訳でもない。昨夜の興奮は一体、何だったのか？　自分の事でありながら、自分でも分からない自分に気付くのです。そればかりではありません。さあ、仕事を始めようと思っても、何となく気分がのりません。アルコールは消し飛んでいるので、二日酔いではない。しかし、前の晩の疲れが残っているのでしょう、すっきりと仕事にかかれないのです。症状は加齢とともに強くなって参りまして、それが厭で、いつしかお酒には手を伸ばさなくなりました。それどころか酒席でも頑として、刺身にジュース、天ぷらにコーラ、お鮨にミルク。楽しみを解さない窮屈者、楽しみを共にしない依怙地者、と周囲から見放されています。でも、誤解です。素面の方が余程、議論も座談も楽しめます。友人とも共感できます。何より翌朝、爽快な頭と身体で仕事に向かうことができるのです。私にとってお酒は、活力を削がれる源。酒は百薬の長、なんて誰が言ったのだろう。答、唐の詩人、杜甫です。解説、李白一斗に、詩百編。本当？

（河北新報　二〇一四年　七月十六日　掲載）

日々の暮らしから（三）　ダンスとニャンコ

私の趣味は社交ダンスなのですが、お相手して下さるご婦人の方々に対して、感謝の意を込め、心中秘かに、尊称を奉っております（注、決して口にはのせません）。しとやかな方にはセリーヌさん、華やかな方にはスカーレットさん、といった具合いです。自身も勿論、名乗っています。私の名前は「まさのぶ」なので、脚韻を踏み、ボブ。即ち、ロバートの略称です。なぜ、ボブかと言いますと、ボブ・キャットから採りました。北米大陸に住む野生の猫です。なぜ、ボブ・キャットかと言いますと、太平洋戦争中、我が連合艦隊の艦載機、零戦に対する米艦隊は、グラマン社製Ｆ４Ｆ、通称ワイルド・キャット（野生猫）からの連想です。ただしボブ・キャットのボブは、人名に由来するのではなく、シッポの先がおもりの様に丸く膨らんでいて、それをボブと言うのだそうです。なぜ、こんな仕様のない事ばかり書いているのか。とにかく私は、大の猫好きなのです。小学生の頃、野良猫を拾ってきて、愛猫にしてしまい、冬の寒い夜など、布団に入れて同衾し、湯たんぽ替わり。寝ても醒めても、明けても暮れても、ネコバカで、心配した両親が猫を取り上げる事態に発展。そういう訳ですので、源氏物語は第二世代の主人公、柏木中納言が女三の宮に恋し、唐猫を身代わりに請い受けて、抱きしめながら狂死していくくだりなど、他人事には思えません。ミュージカル「キャッツ」岩合光昭氏の写真集「ネコに金星」自動掃除機「ルンバねこ」にゃんこのことなら、何でも好き。黒ネコ、三毛ネコ、虎ネコ、みんな好き。ダンスやニャンコに私が狂い死にしないのは、ワンコ派の奥方が、しっかり見張っているからであります。

（河北新報　二〇一四年　八月二十日　掲載）

研究者を目指して（一）　学生時代について

世間の常識から随分と外れているのが、研究者の人生です。先ずは学生時代ですが小生の場合、医学部を六年間かけて卒業。国家試験にパスして医師免許は得たものの、医師にはならずして医学研究者の道に進みたいと思いました。そこで大学院に進学し、博士課程をさらに四年間。修了して頂戴したのは、医学博士という学位です（注、医師免許と医学博士は別物）。従って十八歳から二十八歳までの十年間という長期間を、学生・大学院生として過ごしたことになります。しかも私は、福島から仙台に出て参りましたから、この間の生活は仕送りで成り立っており、全くの親がかり。両親には深く感謝する次第ですが、それにしても、働きもせず、収入もなく、結婚も出来ず、ひたすら学業。そんな十年は何の為、と世間の人は思うのではないでしょうか。しかも、それほどまでにして授与される所の学位。研究者としてスタートをきって宜しいよ、と言ったほどの意味しかなく、収入を保証するものではない。投資に見合う代物では、決してないのです。実際、小生を待っていたのは米国での、一年契約更新の博士研究員。それが七年間。まあ、給料は頂けましたが（なんとか結婚もできましたが）、米国人が言う所の、「貧乏ライン」すれすれの生活でした。安い給料に不安定な身分、リスクだらけで何にも良い所が無いのが、研究者の前半生です。とはいえ、今になって書くから、そう書くのであって、若き日の自分はみじめな思いなど、一切無し。楽しくてしようがなかったのだから、不思議です。サイエンスなり研究には、青年を強力に惹きつける何かがあるのですね。

（河北新報　二〇一四年　五月十四日　掲載）

研究者を目指して（二）　英語について

研究者は、他人の書いた論文を読み、自分もまた、論文を書き発表せねばなりません。医学研究での国際標準、即ち、世界中の人が読む論文といえば、英語で書かれた論文です。よって研究者は須らく、英語での読み書きに習熟していなければなりません。実際、博士課程にまで進むほどの大学院学生であれば、書くのはともかく、英文論文くらいは自在に読めるのが普通です。しかしながら注意せねばならないのは、論文を読めたからと言って、それが直ちに、英語力の上達を意味しているわけではないことです。専門分野には各々、特有の用語があり、覚えるのは大変ですが、その数は意外と限られております。よって、専門用語をいったん覚えてしまうと、論文の構成自体は単純なので、英文読解は容易です。むしろ日常の会話文や新聞記事などのほうが、読解はずっと難しい。例えば、伊達政宗と支倉常長の事績を説明する文章。「大名」「家臣」「ローマ教皇」「通商」「派遣」を、英語で何というのか？　分子生物学の英文論文なら苦労せずに読める小生も、上記に該当する英単語は、一語たりとも脳裏に浮かびません。外国人研究者が来仙しても、自分は何の案内もできないのです。かくてはならじ、英語を何とかものにしたいとの願望には強いものがあります。その為でしょうか、何と時には、英語の夢を見ることもないではありません。夢の中の自分は普段と異なり、英語ペラペラ、振る舞いチャラチャラ。果ては、夢の中で絶叫し、実際に発音し、自分の声に驚いて目が覚める。そうか、英語で寝言したらしいと、気付く次第です。以上、英語で苦しむ研究者の弁でありました。

（河北新報　二〇一四年　七月九日　掲載）

研究者を目指して（三）　研究不正について

研究内容そのものに関する、不正行為のニュースが最近、目立ちます。実を申せば昔も、研究不正はありましたが、あまり目立ちませんでした。それが現在では、研究不正は「捏造」「改竄」「盗用」と分類・定義され、予防策として研究倫理教育が施され、起こった場合の対処方針もマニュアルとして規定されています。ことほど左様に現代は、研究不正が蔓延しやすい環境といえましょう。技術的には、コンピューターとインターネットの発達により、不正を実行しやすくなりました（画像の再利用や加工など）。また、競争の激化・グローバル化により、研究者にかかるプレッシャーが増大し、不正を誘発する心理的要因となっております（著名雑誌への論文掲載のため、研究資金獲得のため、何が何でも、都合のよいデータを出さなければならない）。実を言えば、サイエンスの本来は性善説であり、各人の申告するデータは、正しい手続きにより得られたものと前提しています。研究不正がありえるなどとは、そもそも仮定しておりません。性善説を裏切るかのように、デタラメをやり、競争に勝ち、生き延びるのが（注、暫時ではありますが）、研究不正なのです。それで本当に満足か、などと慨嘆しても始まりません。明明白白な不正でなくとも、再現性のない一回だけのデータを（注、それ自体は「不正」ではない）、つじつま合わせに採用するケースは間々、多々あるものと想像します。しかもそれで、名誉を得ている研究者がいるかもしれないのです。人間が利益に弱い、特に競争下に置かれた場合には極めて弱い、好例かと思われます。

（河北新報　二〇一四年　六月十一日　掲載）

文章について（一）「デス」と「マス」

定型詩に「調子」があることは、容易に理解できます。例えば和歌や俳句での五字、七字の使用、あるいは漢詩での押韻など、型にはめることがリズムを生み出しているのです。ただし、何でも型にはめさえすればよいかというと、そうともかぎりません。和歌がもし、五・五・五・五・五字であったら、さぞかし窮屈でしょうし、漢詩で韻が一・二・三・四行の全てに押されていたら、きっと単調でしょう。それで、和歌は五・七・五・七・七と字数がばらけていますし、漢詩の三行目は押韻されておりません。一瞬、型を破ることにより一層、型の効果が生きてくるわけです。以上の背景を頭に入れたうえで、近代日本語で書かれた文章を眺めてみましょう。特に、丁寧体でかかれた散文。不思議なことに、どんな文でも終わりは必ず、「デス」か「マス」。外国人が、日本語の発音を聞けば、文の終わりは必ず、――――ス。毎度、毎度、韻を踏むみたいに、「ス」「ス」「ス」だらけです。一体、「ス」なる発音は、何事だろうと訝しく感じるのではないでしょうか。外国人になったつもりで、日本語を耳で聞けば、相当に異常な事態なのです。日本語本来の柔らかな響きも台無しです。ですので、不定型の散文にあって、文の調子を整えようと思えば、文末をどう処理するかは、悩ましい作業になります。「デス」「マス」の現在形と過去形、「デアル」の挿入、体言止め、疑問詞の使用などで変化をつける。さらには適切に読点を打つ、各文の長さを変えるなど、あらゆる技法を駆使して漸く、散文にも調子、即ち書き手特有のリズムが生まれてくる。日本語って、やっかいですね。

（河北新報　二〇一四年　八月二十七日　掲載）

文章について（二）　大学の先生

「大学の先生は、希少人種？」違います。東北大学は、八五九人の教授を含めて、三一一六人の教員を擁しています。「大学の先生は、教えるのが上手い？」違います。小・中・高校の先生のほうが大学の先生より、ずっと長時間、授業を担当しています。「大学の先生は、教養がある？」そんなことはありません。明治・大正・昭和の教授はともかく、平成の教授は、専門とする研究領域に関しては詳しいですが、一般教養はさて、どんなものでしょうか。「大学の先生は、文章を書くのが上手い？」ウソです。彼らが書くのは、研究論文か報告書の類いです。研究の世界でのみ通用し、門外漢には珍聞漢文の文章なら彼らは得意です。しかしながら、普通の市民が読んで分かるような文章は、書けません。「文科系の先生は、理科系の先生より、文章が上手い？」これも、ウソです。理科系の先生が自然科学の論文を書くのと同様に、文科系の先生は人文科学や社会科学の論文を書くのであって、普通の文章は書けません。「論文を書くのは、難しい？」そんなことはありません。専門的なトレーニングを積めば、誰でも論文は書けます。それでは、「大学の先生が書けない普通の文章とは何？」人々の暮らしや気持ちを綴った随筆、詩、歌、恋文などです。最後に、「大学の先生とは何者？」各々の専門領域において世界最先端の研究成果を目指して励み、我が国や人類社会の向上発展に寄与すべく活動する職業人です。存在理由は、彼らが果たす機能にあるのであって、彼らの個性や人格にあるわけではありません。よって、恋文は書けなくとも（教養が無いから）、論文が書ければ（トレーニングを積んだから）、十分なのです。

（河北新報　二〇一四年　九月三日　掲載）

慶事 and 惜別

東北大学医学部　ヨット部　部長
佐竹　正延

二〇一三年は私達、東北大・医・ヨット部の歴史、といっては大仰ですが、開部以来の大きな出来事、しかも喜ばしいニュースが三件もありました。第一は何と、我が部が、第五十六回東日本医科学生総合体育大会のヨット競技において、主管校の責任を担ったのです。震災後三年目の再建途上の部ですから、引き受けたりして大丈夫なのかなと当方、心配したりもしましたが、部員も増え、気力も充実していたと見え、部員の皆さん、無事に任務を果たしたようです。私自身も関連して二つほど、用事を引き受けました。一つは競技書の冒頭に、大会会長挨拶の文を掲載した事。過去の文例を見せてもらい、関係各文面への謝辞は型通りに、そのまま引き写しましたが、それ以外は前例踏襲は止め、自分の文を新たに記述しました。もう一つは、競技開始の当日、現地に赴き、開会の挨拶を言上したことです。部員に聞きますと例年、代読が殆どなのだそうですが、我が部が始まって以来の主管です。「是非に」と自ら進んで、四十年ぶりに江ノ島ハーバーまで出かけてみました。その日の朝は霧雨模様で、ロマンチックな風情が漂っていましたね。早目に着きましたので、部員の皆さんが、各校チームとの連絡調整に奔走するのを、垣間見ることができました。事故なく、大会を終了することが出来たのは、皆さんの精励によります。本当に御苦労さまでした。私達、社会に出ている大人も、学会やら大学などで様々なイベントを企画・運営する機会は、多々あります。今回の皆さんの経験も、そんな将来の糧になるのではないでしょうか。

ニュースの二番目は、当該大会での我が部の成績です。これまた何と、団体戦にて準優勝とのこと。この戦績は、開部以来の最高位であります。うーむ、喜ばしい、の一言に尽きます。艮陵新聞を見ますと、二〇一三年の本学・医学部は、東医体・各種競技において、優勝・準優勝の栄誉を多く獲ち得たようです。

三番目は、我がヨット部の歴史についての回想です。本誌・巻末のＯＢ名簿を見ますと、ＯＢ最長老は、昭和四十二年卒業の山形先生・藤原先生です。部の創建が両先生によること、初代主将が山形先生であったことは、先生本人から聞いておりましたが、昭和四十二年とは一九六七年。すると部の創立は一九六一～六三年頃と推測されます。さすれば二〇一三年は、部の創立五十周年にあたるのではないか。一～二年のズレはあるかもしれませんが、現在が五十周年（頃）にあたるのは確かでしょう。私自身は一九七五年（昭和五十年）の卒業ですので、それ以来から数えても既に四十年。延々と断えることなく、我らがＯＢは部活動に励んできたものと、振り返れば感慨深いものがあります。こうした背景に照らしてみますと、一番目・二番目のニュースは、五十年の部の歴史にして、初めて東医体の主管を担い、初めて準優勝したことになります。

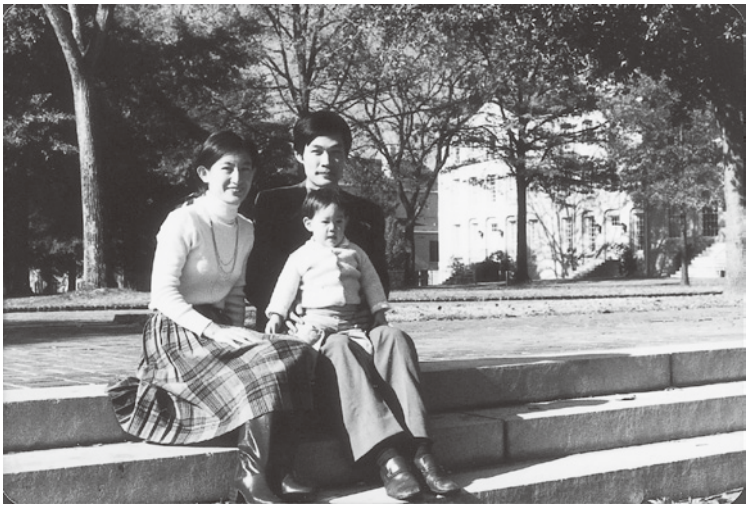
ここで突然ですが（ＮＨＫの「ダーウィンが来た」に出てくる、ヒゲジイみたいな言い様ですね）、小生、平成二十五年度をもって、東北大学を退職予定です。部員の皆様にお別れを告げるのが、上述の慶事の最中であることに、何がしかの縁起を感じております。それはともかく後任の部長を、医学系研究科・加齢研等の教授の中から探し出し、後事をお願いせねばなりません。ヨット部ＯＢの中に教授の方がおられると、話は手っ取り早いのでありますが……。

最後に、ＯＢ・部員の皆様に一言、感謝申し上げねばならない事がございます。部誌の巻頭言を私、二〇一〇・二〇一一・二〇一二年と書いて参りました。いずれも、ヨット部とは関係の無い事を、勝手

気ままに書き散らしております。編集部は、一字の修正を加える事なく、そのまま巻頭に掲載して下さいました。またこれ迄の所、OBの先生方からお叱りも、頂戴してはおりません。有難い事です。しかし、その私の巻頭言も、二〇一三年の本誌で終了。最終回にして初めて、ヨットについて書く事ができました。五十年の歴史の蓄積が間接的とはいえ、比度の部活動の快挙につながったのではないか。想い、遥かなるものがあります。

平成二十六年　二月

（東北大学医学部ヨット部誌「寄港」三―四頁）



サウス・カロライナ大学にて、妻・圭子と長女・綾子。1981年。

研究者を終えるにあたって

謂わく、比拠は加齢医学研究所です。研究所というからには、集う人々は須らく、研究を目指しております。従って研究所内の公的な会合においては、研究のみを率直に議論すべきであり、私的な事柄はいささかも混じえてはなりません。自分としては、そのように行動してきたつもりでした（注。お察しの通り、なかなか、そうはなりませんでしたが）。また研究のなんたるかは、研究の結果のみで測られるべきであって、研究者の人格とは別個のものです。自分としては、そう心得たつもりで、大学や研究所で四十年間を過ごして参りました。

しかしながら、研究への過度の集中から多少でも離れてみますと、研究の結果は確かに研究者とは独立のものではあるけれど、研究を推進しているのは、公も私も渾然とした一人の人間である事に、今更ながら気付きます。

この度、加齢研で話をする機会を頂きました。これが私にとって最期のプレゼンテーションであります。前途への大いなる不安と少しの希望を抱く、二十三歳の青年であった自分が、研究者を目指して励み、四十年後にどうなったのか？　年をとっただけで、なにかになった訳ではありません。故に聞いてためになるのでも、おもしろおかしくもないのですが、やれ、うれしや、一度だけの公々然たる私語（つぶやき）。話すのを許して頂ければと思います。

平成二十六年　三月二十日

東北大学・加齢医学研究所にて　最終講義

頓珍漢問答集　教養とは何か？

「東北大学に入学したのですが、本学はどんな大学なのでしょうか？」

東北大学には建学の理念が三つあり、今でも弥高らかに掲げられています。その一つが「研究第一主義」です。我が国には十一のリサーチ・ユニヴァーシティ、研究重点大学が設置されていて、本学はその中でも有力な一角を占めております。

「研究と教養は、関係があるのでしょうか？」

全く、無関係です。研究とは新知見を発見する、あるいは新技術を発明することです。我が国のみならず全世界で初出でなければ、研究とはいえません。世界で二番目になった途端、研究ではなくなります。既知の思想や歴史が研究対象である場合でも、新事実を掘り起こし、新解釈を施すなりして、やはり新規であることを打ち出さねばなりません。新規であることが、研究の研究たる所以なのです。一方、教養については、必ずしも世界で初めての、日本で初めての教養である必要はございません。古いタイプの教養であっても、何ら差支えがありません。従って研究と教養とは本質的に無関係、異なる範疇に属する事柄なのです。

「であれば、研究者と教養人とは異なりますか？」

はい、違います。優秀な研究者が教養人とは限りませんし、教養豊かであれば研究成果が素晴らし

いとも限りません。

「東北大学が研究第一主義を掲げているということは、本学には研究者はいても、教養人はいないことになりませんか？」

回答、致しかねます。

「研究と研究者、教養と教養人の関係を、もう一度、説明してください」

研究を遂行しているのが、研究者です。ここで研究とは、特に自然科学研究にあっては、普遍性を有することが特徴であり、要請もされております。条件が整う限りにおいては、いつの時代でも、世界中のどこの場所にあっても通用する知見・技術を提供するものです。従って、得られた研究成果は、それを為した研究者から分離され客体化されていきます。つまり、研究者の人柄・人格と研究成果は、別物です。ところが教養とは通常、ある特定の個人に密接に関連するものであります。その人の個性あっての教養であって、人物を離れて、教養のアイテムのみ並べ立てても、無意味・無味乾燥な列挙にしかなりません。ですので、仮に類似の内容であっても、この人、その人ならではの在り方の違いが、それぞれの人物の教養を形作るものと思われます。

「大学は研究以外に、学生教育もその使命としているはずです。教育を受ければ、勉強すれば、教養が身につくものなのでしょうか？」

研究と教養は全く関係がないことを、上で述べました。それに比べれば、教育と教養とは、関係がないこともありません。勉強すれば自動的に教養が身につくとは限りませんが、教養を身につけるた

めには、勉強が必須です。即ち、勉強は教養の必要条件ですが、十分条件ではありません。

「教養を身につけるためには、何を勉強すれば宜しいのでしょうか？　例えば、数学ができれば、教養といえるのでしょうか？」

数学の問題を解けることが、直ちに教養に結びつくわけではありません。決闘に倒れたり、狂死したりした、天才数学者の事例を思い出してください。天才を持ち出さずとも、数学科の学生さんや先生方は数学が出来るに違いありませんが、彼らが教養人であるか否かは、数学科に問い合わせてみなければ分かりません。同様にして、物理学・化学・生物学、あるいは文学・法学・経済学のいずれかを勉強したからと言って、教養といえるかどうか。

「それでは、あらゆる学問を修めれば、教養と言えるのですね？」

全ての学問に深く通じることが、果たして常人に可能なものかどうか、分かりません。もちろん、できるだけ多くの種類の学問につき、できるだけ深い理解を有していれば、それに越したことはないでしょう。しかし、学びによって直接的に得られるものは知識です。知識の多寡で教養が決まるとは思われません。むしろ、ある程度の幅と深さの知識が前提とはなるものの、そこから導かれる、ある個人特有の、総合的な見識みたいなもの。それがあれば、教養といえるのではないでしょうか。

「了解です。すると教養とは、知識の多いことではなく、知性の輝きということですね？」

そう定義して宜しかろうと思います。もう少し説明しますと、知識はその量を定量できますが、教養は定量化できない定性的なもので、しかも個々人に特有な性質のものです。その上で、さらに付言

しますと実は、知性は教養の一部にしか過ぎません。

「えっ！　知性だけでも大変なのに、さらに別の何かを習得せねばならないのですか？」

これまでの話では、教養を知的側面からのみ捉えておりましたね。情と意が抜けています。というのは、人間の属性を分類して昔から、知・情・意というではないですか。教養が全人格的な表現であるとしたら、そう、あってほしいのが私の願いですが、知性が備わったとしてもそれだけでは、片手落ちです。知性に、情と意が加わって初めて、真の教養と言えるのではないかしら。

「感情や意志が、教養と関係があるとは、聞いたことがありません。全学科目や教養科目を履修し、単位を取得すれば、教養は身につくものとばかり、思っていました。」

大きな考え違い、と言わざるを得ません。ちょっと話が跳びますが、「ナンパする」という表現がありますね。男子が女子にアプローチする、例えばお茶にお誘いする時などに使います。この「ナンパ」は、元来は硬派と軟派という人間の二大分類の、後者に由来します。軟派の人間はその性、惰弱にして、個人的な享楽に走る傾向が強く、その一環として男女の事柄に興味を示すものです。一方、天下国家を弁論し、経世済民に身を削るのが硬派の人間です。

「軟派や硬派、情や意が、教養とどう関連するのか、さっぱり分からない」

教養にも、二種類あることを言いたいつもりです、軟派的教養と硬派的教養と。知性に加え、感性の豊かさが備わる場合は、軟派的教養を形づくるでしょう。一方、知性が、強靭な意志の力で統御されておれば、硬派的教養を養うでしょう。大事なのは、単なる分類の話をしているのではないことで

す。教養が何に役立つかを考えますに、それが個人のために有用であれば軟派的教養が、公共のためであれば、硬派的教養が求められます。

「教養科目には、感性を磨いたり、意志を堅固にするようなプログラムは、組まれていないようなのですが」

えっ！　東北大学には、無いのですか。ひょっとしたら、どこのリサーチ・ユニヴァーシティにも、無いかもしれませんね。そうか、現在の大学のカリキュラムは知識偏重で、知性まで到達させてくれるかどうか、難しいところがあります。まして、感性や意志にまでは、配慮が及び難いのでしょう。場合によっては、芸術大学や自衛隊への一週間派遣コースなど、設置してもよいかもしれません。

「そんな⁉　このまま大学にいても、教養なんて身につきそうないように、聞こえてしまいます。」

いいえ、違います。大学生であり、大学に在籍していることが、教養のためには極めて重要なのです。大学には、特に東北大学のような大学には、前途ある秀抜な子女が、そして、必ずしも教養人とは限らないけれど少なくとも研究面では俊秀である教授連が、結集しているはずです。学生さん同士が、あるいは学生と教員が互いに、全人的に交際すれば必ずや、知のみならず情も意も鍛えられる機会が、多々あると思われます。それが大学の、大学たる所以なのではないでしょうか。

「分かったようで、分からない結論ですね。最後の質問です。そもそも教養は、何のために必要なのですか？」

必要のない人には、無くたって一向に差支え無いのが、教養です。私見によれば教養は、必要があっ

て身につける類いのものではありません。身につける人はおのずから身につけるであろうし、縁の無い人には終生、縁が無いでしょう。

平成二十六年　十月

東北大学　全学教育広報誌「曙光」第三八号　九―十一頁

マサチューセッツ工科大学にて、
長女・綾子と長男・正俊。1992 年。

大学・研究・教育関係の各位へ、謝辞

清秋の時候、先生には、変わりなくお過ごしのことと存じます。さて、私事ではありますが小生、過日、六十三歳の誕生日を迎えましたことから、本年・三月をもって、大学を退職しました。来歴を記しますと、十八歳の年に故郷の福島を離れて以来、仙台は東北大学医学部・大学院での学生時代、米国でのポストドク生活、京都大学ウイルス研究所、そして最後の勤務先、東北大学・加齢医学研究所の教員として、大学や研究所にて四十五年間を過ごして参りました。この間、様々な方々に巡り合い、指導を受け、お世話になりましたことに、深く感謝いたしております。とりわけ、加齢研・免疫遺伝子制御研究分野に在籍した二十年間、ともに研究活動に従事して頂いた教員の先生方、秘書さん、そして多数に上る大学院学生の皆様には、厚く御礼申し上げます。大学における活動は全て終了しましたことから、挨拶と致します。まことに、ありがとうございました。

平成二十六年　秋日　佐竹　正延

医療人を目指して、仙台富沢病院職員の皆様へ

縁あって、平成二十六年の四月から、当病院に奉職することになりました。それ以前の私は、二十三歳の年に医学部を卒業して以降、四十年という期間を、大学に在籍しておりました。その間、分子細胞生物学という大変に基礎的な分野での研究活動と、大学院学生の教育に従事してきたわけです。大学を退職後、臨床や病院勤務の経験を全く持たない私が、なぜに、認知症患者さんの診療を旨とする当病院に勤務し、しかも病院長という職責を担うことになったのか？　その経緯には触れませんが、自分の感慨は述べておきたいと思います。

小生の前・勤務先は、東北大学の加齢医学研究所です。加齢研の中、自分の主宰する研究室では、もっぱら知的興味にのみ基づいて、サイエンスに係る研究活動に従事しておりました。しかしながら後に、副所長や所長に就任しますと、管理職という立場上、加齢研全体の理念についても、話したり書いたりする機会が多くなったのです。現代の我が国社会が直面している、緊急にして最重要の医学的課題は、難治性がんと認知症であります。その克服に向けて研究するのが、加齢研のミッションであると、何度も何度も、所内や所外で言い続け、書き続けてきました。自分自身はさっぱり、それら方面の研究に従事していなかったにも拘わらず、です。自身のサイエンスにおける興味と、研究所使命とのギャップに直面し正直、内心は忸怩たる思いでありました。

しかるにこの度、当病院で認知症患者さんの診療に従事する機会を与えられました。大学時代に認知症については、架空に近い言を弄してきましたが、応報として、「幾分なりとも、その具現化に努

めなさい。地域の病院にて現実を体験し、患者さんの役に立ちなさい」　小生にとっては、まことにありがたいご託宣みたいなもの、そのように認識しております。

当病院の基本理念には、包括的に「高齢者医療を中核」とする旨が述べられております。その高齢者医療の中心として認知症を据え、認知症専門の中核病院として活動していることは紛れもありません。小生の責務は、病院の使命を自覚し、地域における当院のステイタスを一層、向上させることにあるものと考えます。民間の病院という組織体である以上、経営を成り立たたせることが先ずは前提となりますが、その上で、認知症患者さんの医療・福祉・介護において、当病院の創意工夫を産み出し、社会に貢献できればと思います。そのためには職員の皆様の協力が是非とも必要ですし、そもそも職員の方々が、当病院で働くことを意気に感じるように環境を整えていければとも、望んでおります。前途は、遥かにして厳しいのかもしれませんが、堅実に進めていきたいと願っております。

平成二十六年　秋日

仙台富沢病院長　佐竹　正延

あとがき

平成二十六年の二月に、それまでに書きとめていた雑文をまとめ、「論文、雑文、残るは詩文」と題して製本しましたが、本書はその後に書いた雑文を収録したものです。四月から九月にかけて二十回にわたり、河北新報「プリズム」欄に掲載した文章が、主な内容となります（一部、加筆しました）。

大学を離れ、論文には縁が無くなりました。かといって、詩文を書く新たな気概が充実するには、未だ至っておりません。これまでの倣いで雑文を書き散らし、その第二集となってしまいました。ご笑納頂ければと思います。

平成二十六年　秋日

著者略歴

佐竹　正延（さたけ・まさのぶ）

昭和二十六年（一九五一）　福島県福島市飯坂町　生まれ
昭和五十　年（一九七五）　東北大学・医学部　卒業
昭和五十四年（一九七九）　東北大学大学院・医学研究科　修了
昭和六十　年（一九八五）　京都大学・ウイルス研究所　助手
平成　元年（一九八九）　京都大学・ウイルス研究所　助教授
平成　五年（一九九三）　東北大学・加齢医学研究所　教授
平成　十八年（二〇〇六）　東北大学・加齢医学研究所　副所長
平成二十四年（二〇一二）　東北大学・加齢医学研究所　所長
平成二十六年（二〇一四）　仙台富沢病院　院長
東北大学　名誉教授

表紙写真：米国、ブライス・キャニオン国立公園にて、
ピンク・クリフを望む。

雑文　第二集　医療人を目指して

平成 26（2014）年 10 月 31 日発行

著者　佐竹　正延
〒 989-3204　仙台市青葉区南吉成 5-9-15

印刷　笹氣出版印刷株式会社
〒 984-0011　仙台市若林区六丁の目西町 8-45
TEL 022-288-5555　http://www.sasappa.co.jp/

GREEN PRINTING JFPI
P-B10004

VEGETABLE OIL INK

この印刷物はグリーン基準に適合した印刷資材を使用して、グリーンプリンティング認定工場が印刷した環境配慮商品です。
インキは環境にやさしい植物油インキを使用しています。